ブーランジェ氏の正体
ーショパンのデビュー・コンサートで歌ったテノール歌手ー

中野 真帆子

Mahoko Nakano

はじめに

フランス人を父に、ポーランド人を母にワルシャワ近郊で生まれ、さらなるキャリアを求めてパリに到着した若き日のフレデリック・ショパン（Frédéric Chopin, 1810-1849）は、翌年の 2 月、プレイエル・ピアノ商会のオーナーとその共同経営者となったピアニスト、フリードリヒ・カルクブレンナー（Friedrich Kalkbrenner, 1785-1849）の協力を得て、プレイエル工房のサロンを舞台にパリ・デビューする。このデビュー・コンサートにはパリの音楽界を担う多くの音楽家が出演し、パリに到着したばかりのショパンを支えた。その出演者のひとりとしてプログラムに名を連ねたテノール歌手のブーランジェ氏（M. Boulanger。M. はフランス語で男性に対する敬称「ムッシュウ」の略。）は、これまで、ショパン関連書の多くにエルンスト・ブーランジェ（Ernest Boulanger, 1815-1900）と紹介されてきた。しかし、近年の研究では、シャルル＝アメデ・ブーランジェ＝クンゼ（Charles-Amédée Boulanger-Kunzé, 1806-1862）なるテノール歌手と考えられている（Eigeldinger 2010: 14, 19: Jude 2022: 188）。当時の音楽雑誌や演奏会に度々、出演者として名を連ね、作曲家としても少なからぬ作品を残しているシャルル＝アメデ・ブーランジェ＝クンゼは、その音楽界での貢献にも関わらず、長年、ショパン研究者の間でオペラ作家のエルンスト・ブーランジェと混同されてしまった。シャルル＝アメデ・ブーランジェ＝クンゼの当時の活動と、ショパンのデビュー・コンサートにおける出演者として、特定可能な根拠について検証する。

１．ショパンのデビュー・コンサート

フレデリック・ショパンが、開かれたばかりのプレイエル・ピアノ工房のサロンでパリ・デビューしたのは 1832 年 2 月 25 日。彼のデビュー・コンサートにはさまざまな憶測が飛び交う。フェティス（François Joseph Fétis, 1784-1871）の「今月 26 日、プレイエ

ル・サロンで開かれた演奏会でショパン氏はピアノ協奏曲を演奏し、メロディー・ラインの発想や転調、構成の斬新さによって、聴衆に喜びと同時に驚きを与えた。」（Fétis 1832c: 38）という演奏会評によって 2 月 26 日（日）に開催されたと信じられてきたコンサートは当夜のプログラム（画像１）の発見によって 2 月 25 日（土）に開催された可能性が高くなり（Eigeldinger 2008: 575-584）[1, 2]、出演者としてプログラムに名を連ねていたメンデルスゾーン（Felix Mendelssohn Bartholdy, 1809-1847）は何らかの理由で参加を見送って聴衆の一人となり、ショパンは予定していたヘ短調のピアノ協奏曲（作品 21）の代わりに、後にカルクブレンナーへ献呈することになるホ短調の『ピアノ協奏曲』（作品 11）を演奏した[3]。当初、12 月 25 日の予定であった演奏会は 1 月 15 日に延期され[4]、さらに、この演奏会の最大の協力者であったカルクブレンナーの体調不良から 2 月 25 日に開催されたことを考えると[5]、出演者や曲目の変更は当然であろう。当日の出演者と演奏曲目は次のようにプリントされていた。

第 1 部

バイヨ、ソゼー、ユラン、ティルマン、ノルブラン各氏によるベートーヴェン作曲五重奏。

トメオーニ嬢とイザンベール嬢による二重唱。

ショパン氏自身の演奏による自作のピアノ協奏曲から《アレグロ》。

イザンベール嬢とステファン氏による二重唱。

ショパン氏自身の演奏による自作のピアノ協奏曲から《ロマンス》と《ロンド》。

～休憩～

---

[1] フェティスはベルギーの音楽学者・理論家で、『ルビュ・ミュジカル・ド・パリ』誌の創刊者（1827）。パリ音楽院で対位法とフーガを 1821 年から 1833 年まで教え、その後、帰国してベルギー王立音楽院の指揮を執った。

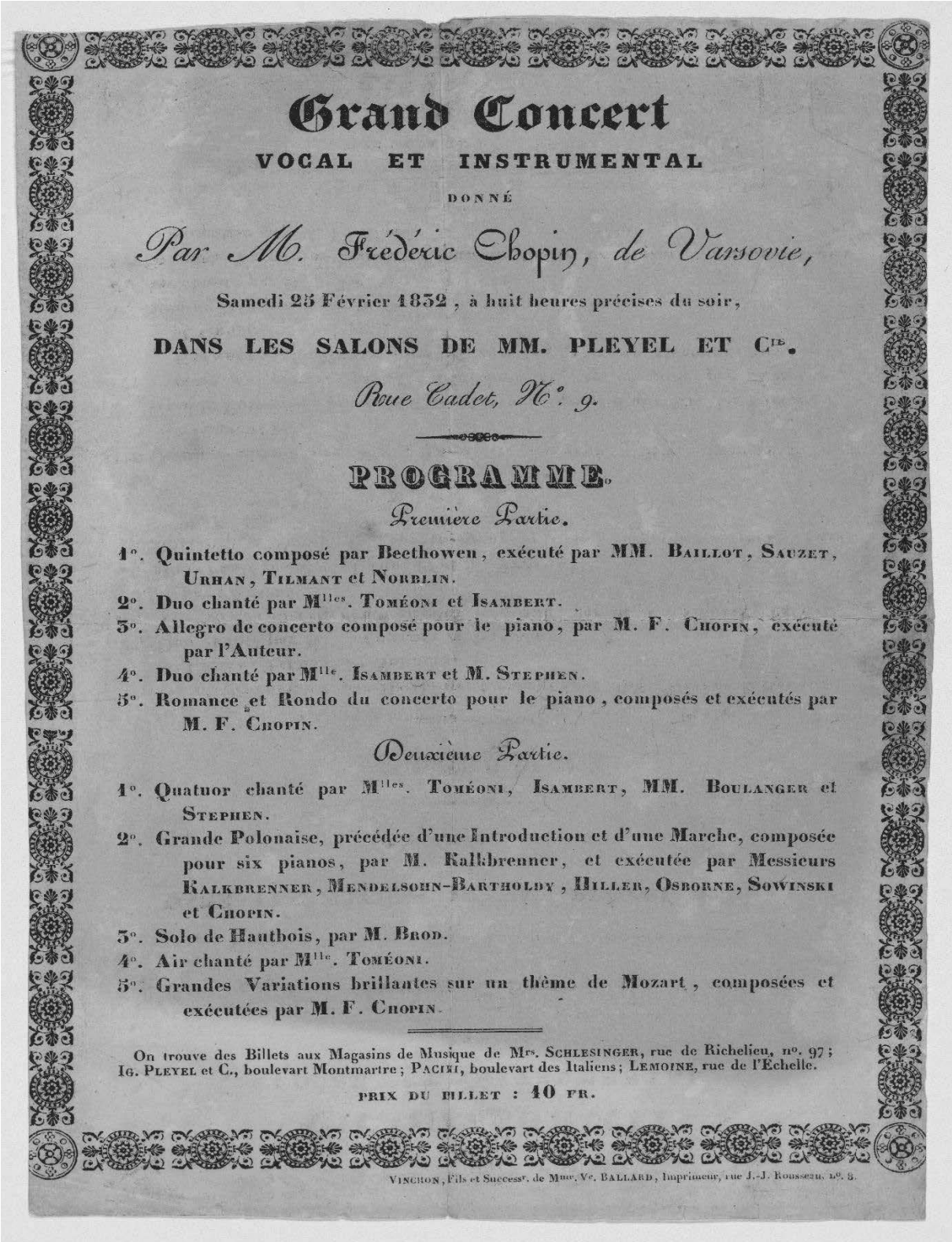
[2] ジャン・ジュードは自著 *Camille Pleyel - Frédéric Chopin Les talents réunis* の第 17 章 “Le concert de Chopin chez Pleyel les 25 et 26 février 1832” で、ショパンのデビュー・コンサートは 1832 年 2 月 25 日（土）と 26 日（日）の両日に開催されたと推定している （Jude 2022: 180-199）。

[3]ショパンは 1831 年 12 月 12 日付けのヴォィチェホフスキへの手紙で演奏会の日程を 12 月 25 日、演奏予定曲目をヘ短調と伝えている（Chopin 1993: 42）。

[4]ショパンは 1831 年 12 月 14 日付のエルスネル宛の書簡でコンサートの延期について言及している（Chopin 1993: 53）。また、1832 年 1 月 7 日発行の『ルビュ・ミュジカル・ド・パリ』誌上では、ショパンのコンサートは 1 月 15 日に開催されると告知している（Fétis 1832a: 387）。

[5]1832 年 2 月 18 日付けの『ルビュ・ミュジカル・ド・パリ』の告知欄（Fétis 1832b: 22）参照。

画像１．ショパンのデビュー・コンサート・プログラム[6]



Grand Concert

VOCAL ET INSTRUMENTAL

DONNÉ

Par M. Frédéric Chopin, de Varsovie,

Samedi 25 Février 1832, à huit heures précises du soir,

DANS LES SALONS DE MM. PLEYEL ET Cie.

Rue Cadet, N°. 9.

PROGRAMME.

Première Partie.

1°. Quintetto composé par Beethowen, exécuté par MM. Baillot, Sauzet, Urhan, Tilmant et Norblin.
2°. Duo chanté par Mlles. Toméoni et Isambert.
3°. Allegro de concerto composé pour le piano, par M. F. Chopin, exécuté par l'Auteur.
4°. Duo chanté par Mlle. Isambert et M. Stephen.
5°. Romance et Rondo du concerto pour le piano, composés et exécutés par M. F. Chopin.

Deuxième Partie.

1°. Quatuor chanté par Mlles. Toméoni, Isambert, MM. Boulanger et Stephen.
2°. Grande Polonaise, précédée d'une Introduction et d'une Marche, composée pour six pianos, par M. Kalkbrenner, et exécutée par Messieurs Kalkbrenner, Mendelsohn-Bartholdy, Hiller, Osborne, Sowinski et Chopin.
3°. Solo de Hautbois, par M. Brod.
4°. Air chanté par Mlle. Toméoni.
5°. Grandes Variations brillantes sur un thème de Mozart, composées et exécutées par M. F. Chopin.

On trouve des Billets aux Magasins de Musique de Mrs. Schlesinger, rue de Richelieu, n°. 97; Ig. Pleyel et C., boulevart Montmartre; Pacini, boulevart des Italiens; Lemoine, rue de l'Échelle.

PRIX DU BILLET : 40 FR.

Vinchon, Fils et Successr. de Mme. Ve. Ballard, Imprimeur, rue J.-J. Rousseau, n°. 8.

© The Morgan Library & Museum.

[6] ニューヨーク・ピアポント・モーガン図書館（The Morgan Library & Museum）所蔵。James Fuld コレクション。Joseph Zehavi 撮影。（The Morgan Library & Museum 2008）。

第２部

1. トメオーニ嬢、イザンベール嬢、ブーランジェ、ステファン各氏による四重唱。
2. カルクブレンナー、スタマティ、ヒラー、オズボーン、ソヴィンスキ、ショパン各氏による、カルクブレンナー作曲《六台のピアノの為の序奏と行進曲付きグラン・ポロネーズ》。
3. ブロード氏によるオーボエ独奏。
4. トメオーニ嬢によるアリア。
5. ショパン氏自身の演奏による自作《モーツァルトの主題による華麗なる大変奏曲》。

このコンサートの二部に登場するのが声楽家のブーランジェ氏である。前述の、『ルビュ・ミュジカル・ド・パリ』誌に掲載されたフェティスによる批評の最後に、この歌い手についての記述がある。

> オーボエ奏者、ブロード氏によるおなじみの才能ある独奏に続いて、ブーランジェ氏とトメオーニ（Herminia Tomeoni, 1808-1851?）嬢、イザンベール（Elisabeth Isambert, 1807-1894）嬢によって何曲かが歌われ、今年度最高の心地よい音楽の夕べは幕を閉じた（Fétis 1832c: 39）。

これについて、文学史家のランボーはその著書 *Chopin : L'enchanteur autoritaire* で、「フェティスによる『ルビュ・ミュジカル・ド・パリ』誌の演奏会評では、歌手エルンスト・ブーランジェのパフォーマンスについて言及されている。」（Rambeau 2005: 278）と解説している。同様に *Fryderyk Chopin, Pianist from Warsaw* の作者、ウィリアム・アトウッドも「1 月に入り、ショパンはようやくコンサートに助演してくれる歌手を見つけることができた：エルンスト・ブーランジェ、エルミニア・トメオーニ、イザンベール嬢の 3 人である」（Atwood 1987: 59）と記し、巻末の注（Atwood 1987: 267）にもエルネスト・ブーランジェの参加が記されている。

エルンスト・ブーランジェは 19 歳でローマ賞を受賞したフランスを代表するオペラ作家である[7]。音楽教育者として名高いナディア・ブーランジェ（Nadia Boulanger, 1887-

[7]1835 年 6 月 7 日発行『ガゼット・ミュジカル・ド・パリ』誌の情報欄に掲載された、エルンストのローマ賞受賞ニュース（Schlesinger 1835: 195）参照。

1979)、24 歳で夭折した女流作曲家リリ・ブーランジェ（Lili Boulanger, 1893-1918）の父親として記憶している音楽関係者も多いだろう。

２．エルンスト・ブーランジェ

エルンスト・ブーランジェの父、フレデリック・ブーランジェ（Frédéric Boulanger, 1777- ?）はドレスデンに生まれ、1797 年から開校されたばかりのパリ音楽院でチェロを学び、王室礼拝堂シャペル・ロワイヤルに帰属する音楽家として活動しながら音楽院で歌唱法の指導者としても評判を得ていたが（Rosenstiel 1978: 20）、エルンストが 5 歳の頃に家族の元から去っている（Rosenstiel 1982: 9）。母親のマリー＝ジュリー・ブーランジェ（Marie-Julie Boulanger, 1786-1850）は、パリ音楽院に学び、1808 年にフレデリックと結婚。1811 年にオペラ・コミック座でデビューし、輝かしいキャリアを積んで 1845 年に引退した、スター歌手であった（Brandus 1850： 254-255）。

エルンストは 1830 年にパリ音楽院への入学を許可され、シャルル・ヴァランタン・アルカン（CharlesValentin Alkan, 1813-1888）にソルフェージュを、ジャック・アレヴィ（Jacques-Fromental Halévy, 1799-1862）に対位法を、ジャン＝フランソワ・ル・スュール（Jean-François Le Sueur, 1760-1837）に作曲様式を師事し、1835 年にローマ賞の第一席を獲得（Fétis 1866-1867: 41）。国家の奨学金を得て翌年の冬にローマへ旅立ち、ヴィラ・メディチに滞在した[8]。その後、フランスへ帰国したエルンストは、1842 年 1 月に歌劇≪Le Diable à l'école≫でオペラ・コミック座にデビュー[9]、作曲家、指揮者として多数のオペラ喜劇を上演し、成功を手にする。1870 年にレジオン・ドヌール勲章を受章。1871 年以降はパリ音楽院の声楽科で教鞭を執り、声楽のレッスン生であったロシア貴族の流れを汲むライサ王女と出逢って、40 以上の年齢差を超え結婚。才能ある娘たちにも恵まれたが、1900 年 4 月 14 日、自宅で 12 歳になった次女ナディアとの美学談義中に 85 年の長きに亘る人生を閉じた（Rosenstiel 1978: 34）。

---

[8]ローマ賞は芸術を専攻する若い芸術家に対して与えられたフランス国家の留学制度。受賞者にはフランス・アカデミーの拠点であるローマのメディチ荘で創作活動を行う義務が課せられ、奨学金が与えられた。この賞はルイ 14 世治世下の 1663 年より実施され（Guiffrey 1908: 1-10）、1968 年まで継続された。

[9]1842 年 1 月 23 日発行の『ルビュ・エ・ガゼット・ミュジカル・ド・パリ』誌にアンリ・ブランシャール（Henri Blanchard, 1778-1858）による≪Le Diable à l’école≫についての初演評が掲載されている。アンリ・ブランシャールはフランスの作曲家、音楽評論家。

さて、ショパンのコンサートで歌ったのはこの華々しい人生を送ることになる、若き日のエルンストであったのであろうか。1815 年 9 月生まれのエルンストは、ショパンのデビュー・コンサートが開催された 1832 年 2 月時点で弱冠 16 歳。両親の影響で常に歌声と関わり、後年はパリ音楽院に請われて声楽家の育成にかかわることになる彼が、ショパンのコンサートで歌った可能性がゼロとはいえない。しかし、現時点の資料では、パリ音楽院在学中のエルンストが歌を専攻していた記録も活動歴も見当たらない。一方で、1830 年前後からパリのサロンや音楽ホールで頻繁に歌っていた、“M. ブーランジェ”というテノール歌手の存在がある。

３．ブーランジェ氏

この M. ブーランジェがエルンストでないことは、かなり容易に証明できる。M. ブーランジェは『ルビュ・ミュジカル・ド・パリ』の創刊当初（1827）から、テノール歌手として誌上で定期的に言及されているが、ローマ賞の受賞によって 1836 年の 2 月初旬にローマへ旅立ち[10]、1838 年の 8 月の後半までフランスを離れていたエルンストが[11]、同時期に“M. ブーランジェ”と称してパリで歌うことは物理的に不可能だからだ。エルンストが確実に不在であった 1836 年 2 月から 1838 年 8 月の後半まで、『ルビュ・エ・ガゼット・ミュジカル・ド・パリ』誌に掲載された、M. ブーランジェ関連の記事を表 1 として掲げる[12]。

他に、1837 年 11 月 26 日（日）にジムナーズ音楽ホールにて開催された『ル・メネストレル』誌主催コンサートの告知[13]や、1838 年 2 日 18 日（日）付けの『ラ・フランス・ミュジカル』誌にジメルマンのサロンで歌ったブーランジェ氏についての評（Escudier 1838: 6）があるが、注目すべきは 1836 年 7 月 24 日発行の『ルビュ・エ・ガゼット・ミュジカ

[10]母親にあてた手紙の消印から、エルンスト・ブーランジェが、少なくとも 1836 年 2 月初めにはパリを離れ、リヨン、マルセイユ、ジュネーヴを経てローマに向かったことが判明している（Boulanger 1836a）。

[11]同様に、母親宛の手紙の消印により、エルンストが 1838 年夏にローマを発ち、ヴェニス、ウィーン、ミュンヘンを経て、8 月後半にシュトラスブールに滞在していたことが推察される（Boulanger 1838a, 1838b, 1838c）。

[12]『ルビュ・ミュジカル・ド・パリ』誌はモーリス・シュレザンジェ（Maurice Schlesinger, 1798-1871）によって 1834 年 1 月に創刊された『ガゼット・ミュジカル』誌と合併し、1835 年 11 月 1 日より『ルビュ・エ・ガゼット・ミュジカル・ド・パリ』として出版された。

[13]1837 年 11 月 26 日発行の『ル・メネストレル』誌に掲載されたプログラム（Heugel 1837: NP）参照。

表１：『ルビュ・エ・ガゼット・ミュジカル・ド・パリ』誌上に掲載された M. ブーランジェに関する記事（1836 年 2 月から 1838 年秋まで）

年	発行月日	内容
1836	2 月 14 日（日）	2 月 7 日（日）に、リル通り 17 番地に住むドイツ出身の音楽家、カール・シュンケ（1801-1839）のサロンで開催されたプライベート・コンサートに出演。ショパンもシュンケとモシュレスのソナタを連弾している。
1836	5 月 1 日（日）	4 月 21 日（木）に貴族院の大法官、ドゥ・カーズ公爵（Élie Decazes, 1780-1860）の公邸にて Clapisson 作曲のノクターンを歌唱。ショパンも自作のワルツを演奏している。
1836	7 月 24 日（日）	ブーランジェ作曲による楽譜情報。 ≪ブルターニュの徴集兵、Le Conscrit breton, ロマンス romance≫2 フラン[14]。 ≪すみれ、La Violette, ロマンス romance≫2 フラン。
1837	1 月 28 日（日[15]）	1 月 30 日（月）にパッサージュ聖ペール 5 番地、セルヴィック氏のサロンで開かれるハントゥート夫人のコンサート予告。
1837	3 月 5 日（日）	3 月 14 日（火）8 時にジムナーズ音楽ホールでコシェ夫妻によって開催されるコンサート予告。
1837	3 月 12 日（日）	3 月 14 日（火）8 時にジムナーズ音楽ホールでコシェ夫妻によって開催されるコンサート予告。
1837	4 月 1 日（日[16]）	3 月 29 日（木）に開催されたオズボーン氏の演奏会評。
1837	4 月 1 日（日）	3 月 14 日（火）20 時にジムナーズ音楽ホールでコシェ夫妻によって開催された演奏会評。
1837	12 月 31 日（日）	1838 年 1 月 4 日（木）にパリ市庁舎のサン・サンジャン・ホールで開かれる、ド・ラヴェルニュ嬢によるグランド・コンサート予告。
1838	2 月 11 日（日）	フランチェスコ・パチーニ（Francesco Pacini, 1778-1866）出版による 101 人の作曲家から集めた音楽作品集『百一の書』の宣伝。
1838	4 月 1 日（日）	3 月 28 日（水）ヴァンタドゥール劇場のホワイエで開催されたポーランド人ピアニスト・ソヴィンスキの演奏会評。
1838	4 月 29 日（日）	4 月 21 日（土）にヴァンタドゥール劇場のホワイエで開催されたチャリティー・コンサート評。
1838	8 月 19 日（日）	8 月 5 日（日）、ラ・シャペル・サン・ドニで行われた音楽付きミサについての記事。

ル』誌の宣伝ページに M. ブーランジェ作曲の楽譜として告知されている『ブルターニュの徴兵の歌』と『すみれ』の 2 作品である（Schlesinger 1836: 265）。この 2 つの歌曲（ロマンス）は、C. アメデ・ブーランジェの名で出版されている作品目録のタイトルと完全に一致する。

[14] ロマンスは、抒情的な旋律を表現の主体とする声楽曲。フランスでは 19 世紀前半まで、歌曲を「ロマンス」と呼んでいた慣習に由来する。

[15] 1837 年 1 月 28 日は土曜日なので、印刷ミスの可能性が高い。

[16] 本来、1837 年 4 月 1 日は土曜日であるが、エイプリルフールのサプライズかもしれない（フランス人にありがちな悪戯）。

つまり、“M.ブーランジェ”と“C. アメデ・ブーランジェ”は同一人物である。以下、現時点で確認されている C. アメデ・ブーランジェ”の作品を表２としてまとめた。

表２．シャルル＝アメデ・ブーランジェの作品リスト[17]

1880	Les Oiseaux, transcription-nocturne, sur la mélodie de Boulanger-Kunzé, pour piano
1868	L'Espérance. Mélodie Allemande. Paroles de Mr A. de SonhoroKabouilin. Traduction française de Em. Pacini
1868	Passez, passez, beau voyageur. Chansonnette. Paroles de Hippolyte Dugied
1864	Les Oiseaux, mélodie de Boulanger-Kunzé arrangée pour piano. op. 1
1863	Un Envoi de fleurs, dernière mélodie, poésie d' Emile Angier
1861	Les Oiseaux mélodie. 32ème Méditation de Lamartine
1861	Papillon vole. Melodie. Paroles de Hippolyte Dugied
1861	Le Mal du pays, mélodie, paroles de Emile Souves
1860	Album des contemporains
1859	15 Motets et Cantiques pour les différentes Fêtes de l'année, à une, deux et trois voix, avec accompt. d'orgue ou Harmonium ou de piano par C. A. Boulanger-Kunzé
1857	Si j’étais Toi ! mélodie, paroles de Mohser
1857	Un vieux donjon, mélodie, paroles de Auguste Poulet
1853	Jouez parmi les fleurs ! Mélodies. Paroles de Mr Hippolyte Dugier
1853	Dona Isabelle. Boléro. Paroles de Mr Hippolyte Dugiod
1851	Pâques fleuri, mélodie, paroles de H.te Dugied
1849	Salve Regina. Motet a la Vierge, pour deux voix égale
1849	Duettino da camera. Pour voix de soprano et tenore
1845	Le Roi des mers. Ballade pour voix de basse. Paroles de Parfait Rouge
1845	La Madone. Mélodie. Paroles de Parfait Rouges
1844	Messe à deux voix [avec accompagnement d'orgue ou de piano]. composée expressement pour les cours de C. A. Boulanger-Kunzé
1843	Pourquoi partir ? Mélodie. Paroles de Mme Fanny Savre
1842	Voila comment je t'aime. Paroles de Mr H.te Dugied
1842	Ne vous éveillez jamais. Paroles d' H.teDugred
1842	Adieu. Mélodie. Paroles de Mr Crevel de Charlemagne
1842	Ce qui me captive. Paroles d' Hte Dugied
1841	Reine des cieux. Romance. Paroles de Mr Hyp.te Dugied
1841	Elle ne reviendra pas. Romance. Paroles de M. le Comte de C***
1839	Donnez à la Madame. Romance. Paroles de Mr Hippolyte Dugied
1838	La Chasse de Chantilly[18]
1838	Si!…[25]
1837	La violette. Romance d'Eugène Hanappier ロマンス『すみれ』
1836	Romances et Chansonnettes de MM. Plantade et Boulanger [avec accompagnement de piano]
1836	Le conscrit Breton. Paroles de Mr Albert『ブルターニュの徴兵の歌』
1835	"Pangelingua. Hymne à 4 voix avec accompagnement de violon alto et Basse. Dédié à son ami Amédée Boulanger"..."Par G. Duprez"..."Paris ce 12. f.er 1835"" de G.Duprez *avec Charles-Amédée Boulanger-Kunzé (1806-1862) comme Destinataire del'envoi*
1827	Della Rosa il vermiglio, cavalina カヴァティーナ
1827	La precaution inutile, romance『無用な心配』、ロマンス
1800	"La cloche du monastère" pour 2 voix et piano

[17] フランス国立デジタル図書館データベースに掲載されたシャルル＝アメデ・ブーランジェの作品リスト参考（Bibliothèque nationale de France 2022）。

[18]1838 年 2 月 4 日発行の『ル・メネストレル』誌に掲載されたブーランジェの楽譜の宣伝記事（Heugel 1838: NP）参照。

	Ma nacelle est si belle, barcarolle, paroles de Hippolyte Dugier
	Frantz le chasseur. Paroles de Th. Muzet
	Solfège élémentaire à une et à deux voix, expressem.t composé pour les cours de C.A. Boulanger Kunzé
	Plus d'espoir--Seto revoir.（Chant Breton）. Paroles de Mr Hipp.te Dugied
	La Prière. Paroles de Mr. H. Dugied. Mise en musique... par Mr Boulanger Kunzé. Accompagnement de guitare, par J. Vimeu
	Son moretto, vénitienne, paroles de Roger de Beauvois
	Doux oracle des champs. Paroles de Mr Paul Tavernier... [A ｜ voix et piano]
	Où je m'allache, là jo meurs ! Paroles de Mr Eugène de Lonlay
	Méfiez-vous des blancs.（Chant du nègre）. Paroles de Mr H.te Dugied
	Le Feu follet, chansonnette, paroles de Théodore Muret
	Petit pied, chansonnette, paroles de Hippolyte Dugied
	Chanson d'Auvergne. Paroles de Mr Eugène de Lonlay
	Doux oracle des champs. Paroles de Mr Paul Tavernier
	Si j'étais petit oiseau, nocturne, paroles de J. P. de Béranger
	Plus de bonheur sans toi, romance [avec piano]. Paroles de Mr P. Fournier
	La Fiancée du contrebandier, paroles de Théodore Muret

創刊まもない 1827 年 6 月号の『ルビュ・ミュジカル・ド・パリ』誌のアナウンス欄には、C. アメデ・ブーランジェの作品が、楽譜の情報と共に紹介されている。

> 『デッラ・ローザ・イル・ヴェルミグリオ』、
> C. アメデ・ブーランジェの音楽によるカヴァティーナ。
> 4 フラン 50、ドーフィン通り 32 番地、ルモワンヌ楽譜出版社。
> 『無用な心配』、ロマンス、1 フラン 50。
> この 2 つの作品において、若い作者がロマンスの形式のみにこだわらず、作品のさらなる拡がりを目指していることを頼もしく思う。彼のカヴァティーナは全体を通して心地よく、伸びやかに発展している（Fétis 1827: 435-436）[19]。

“歌曲（ロマンス）作家”として模索する青年音楽家、C. アメデ・ブーランジェの微笑ましい姿が思い描かれる初期の作品評である。

[19] カヴァティーナはイタリア語源の素朴な旋律をもつ歌謡的な声楽曲。

４．ブーランジェ＝クンゼ夫妻

ショパンのデビュー・コンサートから約 10 ケ月後、1832 年 12 月 9 日（日）付けのレクレルール誌には[20]、12 月 14 日（金）に開かれるコンサートの出演者として、ショパンと共に M. ブーランジェの名がプログラム（画像２）に記されている（N. 1832: 1）。

第 1 部

1° ロンドンの劇場所属アーチスト、ゴルドーニ夫人とアルノー氏による二重唱[21, 22]。

2° ブーランジェ夫妻による声楽二重

3° M. ユエルタ作曲・演奏によるギターのための鈴の伴奏付き宗教ソナタ。

4° ゴルドーニ夫人によるメルカダンテのアリア。

5° ショパン氏によるピアノ独奏。

6° ブーランジェ氏によるロマンス独唱。

7° ユエルタ氏作曲・演奏によるスペイン風フォリアのテーマに基づくファンタジー。

第 2 部

1° コニンクス氏によるフルート独奏[23]。

2° アルノー氏の歌唱による『夢遊病の女』のアリア。

3° ブーランジェ＝クンゼ夫人によるアリア。

4° ユエルタ氏の演奏によるフランス、イタリア、スペインのアリアによるメドレー。続いてフェルナンド・ソル作曲のアリアの主題による変奏曲。

---

[20] レクレルール L'Eclaireur 誌は毎週日曜日に発行されていた情報誌。

[21] エレオノーレ=マリー・ゴードン（Éléonore Marie Gordon, 1808-1849）はロッシーニから指導を受けたパリ生まれのコントラアルト。

[22] ジャン=エティエンヌ・アルノー（Jean-Etienne Arnaud, 1808-1849）はマルセイユ出身の歌手・作曲家。

[23] ルイ=ジョセフ・コニンクス（Louis-Joseph Coninx, ca.1803-1876）は、デュッセルドルフ近郊に生まれ、フランスに帰化したフルート奏者、作曲家。1830 年頃にパリに定住し、国王の楽団の一員となった。パリの主要なサロン・コンサートで頻繁に演奏し、高い評価を受けた。

画像２．**1832** 年 **12** 月 **9** 日の発行のレクレルール誌上に掲載された演奏会告知[24]

DIMANCHE 9 DÉCEMBRE 1832. (*PARAISSANT TOUS LES DIMANCHES*). 1re ANNÉE.

L'ÉCLAIREUR,

Journal d'Annonces générales, ou Petites - Affiches légales.

Les Bureaux du Journal sont rue Chantereine, n. 30, où l'on reçoit tous les jours les Insertions à faire et les réclamations de tous genres. (*Les Lettres et Paquets doivent être adressées*, FRANC DE PORT.)

Par Brevet d'invention des Gouvernemens Français et Anglais. Bandages Herniaires, s'ajustant d'eux-mêmes sans Sous-Cuisses et sans fatiguer en aucune manière les hanches.

La Hernie ou Descente négligée devient une maladie fâcheuse, incommode, et d'autant plus dangereuse qu'elle est volumineuse et ancienne; elle menace sans cesse les personnes qui en sont affligées, et quelquefois elle exige la nécessité d'une opération très-grave. Les Bandages élastiques de WICKHAM et Cie, de Paris, sont les moyens assurés de prévenir les accidens qui peuvent en être la suite. Ils offrent des avantages et une commodité bien reconnues qu'on ne trouve pas dans toute autre espèce de Bandages qui aient paru. Ces Bandages sont des moyens à la fois sûrs et commodes; ils se composent d'un ressort d'acier dont on peut augmenter la force au moyen de lames supplémentaires. Chaque extrémité du ressort principal est terminée par une pelote plus ou moins mobile qui se porte dans toutes les directions, s'accommode aux divers changemens du ventre et se prête à tous les mouvemens du corps sans que son point d'appui principal se déplace en rien de l'endroit d'où sort la Hernie, et empêche ainsi la sortie des parties, quelle que soit leur intensité. L'utilité en a été généralement reconnue par tous les principaux Chirurgiens de Paris, éclairés et impartiaux, et l'expérience en prouve de plus en plus la supériorité sur tous les Bandages usités jusqu'à ce jour.

Pour se procurer ces Bandages, l'on est prié de s'adresser à Paris, à MM. WICKHAM et HART, rue St-Honoré, n° 257, près celle Richelieu, où l'on délivre des Prospectus gratis.

Toutes demandes par lettres doivent être affranchies et accompagnées d'une mesure du tour du corps, prise autour des hanches en venant se rejoindre à la jonction du pubis, ainsi que d'une indication sur la grosseur ou le volume de chaque hernie, de même, si la personne a de l'embonpoint.

Il y en a pour les personnes des deux sexes et de tout âge.

Grand Concert Vocal et Instrumental, donné par M. HUERTA, le vendredi 14 décembre 1832, Salle Taitbout, rue Taitbout, n° 9. On commencera à 8 heures précises du soir.

PROGRAMME.

1re PARTIE.

1° Duo chanté par Mme Gordoni et M. Arnaud, artiste du théâtre de Londres.

2° Duo chanté par M. et Mme Boulanger-Kunze.

3° Sonate religieuse pour la guitare avec accompagnement de clochettes, composée et exécutée par M. Huerta.

4° Air de Mercadante chanté par Mme Gordoni.

5° Solo de piano-forté composé et exécuté par M. Chopin.

6° Romances chantées par M. Boulanger.

7° Fantaisie sur le thème *les folies d'Espagne*, composée et exécutée par M. Huerta.

2me PARTIE.

1° Solo de flûte exécuté par M. Connix.

2° Air de la Somnambula chanté par M. Arnaud.

3° Air chanté par Mme Boulanger-Kunze.

4° Pot-Pourri composé d'airs français, italiens et espagnols; suivi d'un air varié de M. Sor, exécutés par M. Huerta.

Nota. M. Huerta exécutera une des variations avec la main gauche seulement.

M. Tadolini, directeur de la musique du Théâtre Royal Italien, tiendra le piano.

Sur la demande d'un grand nombre d'amateurs, M. Huerta jouera l'ouverture de *Sémiramis*.

PRIX DES PLACES.

PREMIÈRES LOGES	5 Fr.	
DEUXIÈMES LOGES et PARQUET	3	50 Cent.
TROISIÈMES LOGES	2	

On trouve des billets de toute place, chez M. Pacini, marchand de musique, boulevard des Italiens, n. 11; Savaresse, au Palais-Royal; chez M. Huerta, rue du Helder, n. 16; et chez les principaux marchands de musique.

Par brevet d'invention. — Bougie de l'Étoile.

Depuis long-temps la fabrication de la Bougie réclamait des perfectionnemens dont tous les consommateurs sentaient le besoin. La Bougie dite de *l'Étoile*, à la formation de laquelle on a fait concourir, avec les découvertes successivement adoptées dans divers pays, des procédés chimiques d'une invention toute récente et d'une application toute spéciale, vient enfin de combler cette lacune de notre industrie manufacturière.

Cette Bougie, qui, par sa blancheur, sa demi-transparence, le lustre de son poli, la régularité de ses formes, puisqu'on est parvenu à la mouler, se place pour l'aspect au-dessus des produits les mieux fabriqués en ce genre, leur est encore supérieure dans son usage par la pureté, la blancheur, a constante immobilité de sa flamme, exempte de ces vacillations incommodes qui fatiguent tant les yeux délicats.

La manière particulière avec laquelle la mèche est préparée l'empêche de présenter ces pétillemens et ces champignons que la cire offre si souvent avec les autres mèches, en même temps qu'elle lui communique l'avantage de s'allumer et de s'éteindre avec une rare promptitude.

Cette Bougie ne coule jamais, tant que sa flamme n'est pas agitée par un courant d'air ou par des déplacemens brusques et successifs, épreuve à laquelle aucune bougie ne résiste et ne doit résister.

Destinée à devenir une branche importante de commerce, la Bougie de *l'Étoile* devait être livrée au prix le plus bas possible, et le taux en été fixé à 2 fr. 25 cent.

Entrepôt général : rue du Dauphin-Rivoli n. 1.

Dépôts : rue Vivienne, n. 15;

Rue des Fossés-St-Victor, n. 14.

Prix fixe invariable.

Passage des Panoramas, n. 49, vis-à vis l'entrée particulière du théâtre des Variétés.

Guilloiet et comp., bijoutiers, fabricans de Bijoux de fantaisie, composition dorée, parfaite imitation des Diamans et pierreries de toutes couleurs, Objets de Théâtre, Parures pour bals et réunions.

Tiennent des Objets de Deuil en jais et fer de Berlin, première imitation des Perles fines et autres; confectionnent toute espèce d'imitation d'Or en Bijoux, Décors et Bijoux maçonniques. — Se chargent des raccommodages; font la commission. A Paris.

M.

Je prends la liberté de recommander à votre bienveillance mon établissement lithographique; soin et exactitude dans les commandes qui me seront confiées, extrême modicité dans les prix ainsi que vous pouvez vous en convaincre par le PRIX COURANT ci-joint, tels sont les titres auxquels j'ose aspirer à votre confiance.

Source gallica.bnf.fr / Bibliothèque nationale de France

[24]このコンサートはスペイン出身のギタリスト、ユエルタ（Francisco Trinidad Huerta, 1800-1879）によってパリのサル・テブーで開催された。

このコンサートの前半に二重唱で出演しているブーランジェ＝クンゼ夫妻が、1830 年 8 月 14 日に結婚したシャルル＝アメデ・ブーランジェ氏と F. クンゼ嬢であり[25]、夫妻がパリのミショディエール通り 11 番地に居住していたことは、金融機関に残された記録やパリ市の公文書館に保存されている婚姻届、当時の住所録から立証できる[26]。ショパンの独奏の後に『ロマンス』を独唱していることも、シャルル＝アメデ・ブーランジェがロマンスを多数作曲している事実と合致する。この日に歌ったブーランジェ氏がシャルル＝アメデ・ブーランジェであることは、間違いないだろう。妻になった F. クンゼ嬢は 1830 年の結婚以来、ブーランジェ＝クンゼ夫人の名で活動している。これはおそらく、1811 年から 1845 年にかけて、オペラ・コミックで大活躍していたエルンストの母親であるマリー＝ジュリー・ブーランジェの存在を考慮してのことであろう。他方の C. アメデは結婚後も変わらず、ブーランジェ氏とのみ表記されていることが多い。これは、彼がテノール歌手として、ユニークな存在であったことの証しではないだろうか。その C. アメデ・ブーランジェも、エルンスト・ブーランジェのローマ賞受賞以降、ブーランジェ＝クンゼと表記されることが多くなったようだ。対して、楽譜などの出版物には、ほぼ一貫してフルネームかイニシャルで本来の C. アメデ・ブーランジェの名が使われているのは興味深い。さて、C. アメデ・ブーランジェどのようなタイプの声楽家であったのだろうか。

５．ベルリオーズから見た C. アメデ・ブーランジェ

楽壇の異端的な存在であったにもかかわらず、創作に加えて指揮や評論の分野で精力的に活躍していたベルリオーズ（Hector Berlioz, 1803-1869）とブーランジェ夫妻の関係は深い。妻のブーランジェ＝クンゼ夫人は、ヴィクトル・ユゴー（Victor Hugo, 1802-1885）の詩にベルリオーズが旋律をつけた『囚われの女』の初演を 1832 年 12 月 30 日に、C. アメデ・ブーランジェはオーギュスト・ブリズュー（Auguste Brizeux, 1803-1858）の

[25]ブーランジェ＝クンゼ夫妻の婚姻証明書はパリ市によってデジタル化された公文書のウェブサイト上で閲覧可能（Archives de Paris 2022）。

[26] 1834 年にパリ・イル・ド・フランス金融公社（Caisse d'épargne de Paris et Île-de-France）加入者リストに記載されたブーランジェ夫人の住所参照（Caisse d'épargne de Paris et Île-de-France 1834: 9）。音楽愛好家やプロのアーチストにとって有益なデータが掲載されている音楽年鑑帖によると、1836 年度のブーランジェ＝クンゼ氏の登録住所はミショディエール通り 25 番地（Ancien élève du Conservatoire 1836: 60）。レッスン専用ルームとして住居と同じ通りに所有していたのかもしれない。Almanach 事務局による 1847 年度のパリの名士年鑑によるブーランジェ氏の登録住所はミショディエール通り 11 番地（Corby 1847: 78）。

詩にベルリオーズが旋律を付けた『ブルターニュの若き羊飼い』を 1833 年 12 月 22 日に、それぞれパリ音楽院のホールで初演し、その後も定期的にベルリオーズのコンサートに出演していたことは当時の演奏会記録や各音楽情報誌によって明らかである。ベルリオーズ関連の演奏会に出演した C. アメデ・ブーランジェの演奏記録を表 3 として年代順に並べた。

表 3．ベルリオーズ関連の演奏会に出演したブーランジェの演奏記録

1833	5 月 2 日（木）	『ヨーロッパ文学』誌[27]による演奏会。 『レリオ』より『漁師』を独唱。	ヨーロッパ文学館
1833	6 月 6 日（木）	『ヨーロッパ文学』誌による演奏会。 『レリオ』より『漁師』を独唱。	ヨーロッパ文学館
1833	12 月 22 日（日）	『ブルターニュの若き羊飼い』初演。	パリ音楽院ホール
1834	11 月 9 日（日）	ベルリオーズによるコンサート第 1 回 男声四重奏版『水浴びをするサラ』、 『美しき旅人』の初演。	パリ音楽院ホール
1834	12 月 14 日（日）	ベルリオーズによるコンサート第 3 回。 『レリオ』より『漁師』を独唱。 ショパンも自作の『アンダンテ』を披露。	パリ音楽院ホール
1835	4 月 9 日（木）	リストの慈善コンサート 『レリオ』より『漁師』を独唱。 続いてリストの独奏。	パリ市庁舎内 サン・ジャン・ホール
1835	5 月 3 日（日）	『レリオ』より『漁師』を独唱。	パリ音楽院ホール
1835	12 月 13 日（日）	ベルリオーズによるコンサート第 2 回 グルック『アルミード』からルノーのアリアを独唱。	パリ音楽院ホール
1838	11 月 25 日（日）	病に倒れたベルリオーズ不在で開催されたコンサート。 クラーリ神父[28]作曲のマドリガル二重唱。 ≪Cantando un di,madrigal a deux voix≫。	パリ音楽院ホール
1840	12 月 13 日（日）	『水浴びをするサラ』混声四重奏版初演。	パリ音楽院ホール

1834 年 12 月 14 日開催のコンサートで、ベルリオーズの作品を歌った C. アメデ・ブーランジェは、1834 年 12 月 28 日付けの『ガゼット・ミュジカル・ド・パリ』誌上で「ブーランジェ氏もまた、ベルリオーズ氏による歌曲のパフォーマンスによって、表情豊かな声と美しい歌唱法に加え、自分の才能に託された曲の精神を理解する能力も持っているこ

[27]『ヨーロッパ文学』L’Europe littéraire は、1833 年に創刊されたヨーロッパの美術や文学を扱ったフランスの週刊誌。

[28]ジョヴァンニ・カルロ・マリア・クラーリ（Giovanni Carlo Maria Clari, 1677-1754）は、イタリアの作曲家。ピストイア大聖堂の礼拝堂長としてオーケストラを再編成し、音楽学校の教育システムに貢献した。

とを示した。」（R., P. 1834: 426）という高い評価を得ている。ベルリオーズ自身の同時期の C. アメデ・ブーランジェに対する率直な評価は 1835 年 1 月 5 日付けの『改革者』誌の≪コンサート欄≫で述べられている。

> ブーランジェ氏は、音楽関係の集いには必ず招かれ、また聴きたいと思わせる、魅力的な声の音程も確かなテノールだが、エネルギッシュなオーケストラに対抗するには弱すぎて、大きなハンディキャップになってしまう。それで彼はピアノに伴奏させる。彼のメソッドの質の高さ、フレーズのセンス、リズムの正確が理解されるように。彼の優雅な声質にマッチしたロマンスやデュエットの数曲は、コンセルヴァトワールという、普段は歌手を甘やかすことのない聴衆によってその価値を認められた（Berlioz 1998: 4）。

同様に、1835 年 4 月 25 日発行の日刊紙『ジューナル・デ・デバ』にもベルリオーズから見た C. アメデ・ブーランジェ評が掲載されている。

> ブーランジェ氏は、『漁師』のバラードを美しく歌い上げた。ファースト・テナーの声には柔軟性があり、高音域の伸びが素晴らしいが、勢いある情熱的なアクセントとは無縁である。自分の声質に見合った曲しか歌わないし、伴奏もオーケストラよりピアノを選ぶという良識がある。彼の声は素晴らしい正確さと滑らかさを備え、中音域のミから高音域のドのシャープまで完璧な精度で、低音にも全く無理がない；低音は僅かな加減で音色が変わってしまうので、決して力を行使してはならないのである。M. ブーランジェの声は、ショパンの独創的なカプリスや魅惑的なマズルカを貴婦人のプライベートルームで奏でるために創作された、あの見事なユニコード・ピアノのようだ。しかし、リスト氏のオーケストラ的な響きの怒涛の中では吹き飛んでしまうだろう（Berlioz 1998: 129）[29]。

[29] 「ユニコード・ピアノ」は 1825 年にプレイエル社が特許を申請した（Jacquot 1886: 181）、1 音につき 1 本の弦を用いたピアノ（Huberson 1891: 11）。調弦が容易で、ピュアな音色が追求された（Jude 2022: 132-139）。

ベルリオーズから見たC.アメデ・ブーランジェは、まさにテノール界のショパンだった！ショパンは他のピアニストに比べ、公に演奏することに対して消極的であったにもかかわらず、かなりの確率でC.アメデ・ブーランジェと同じ舞台を踏んでいる。大規模な演奏会場より、選ばれたものだけが招かれる、夜会でこそ本領を発揮し、時には一晩にいくつもの夜会を梯子していたという点も共通している（Schoderlichenerasfeldesberg 1839: 19）。C.アメデ・ブーランジェとショパン、声と楽器という差はあるが、この二人の音楽への美学には共鳴するものがあったに違いない。C.アメデ・ブーランジェの声楽家としての実像が生き生きと蘇る、ベルリオーズならではの貴重な証言である。

６．ショロンの愛弟子

1838年4月6日発行の『ジューナル・デ・デバ』紙には、「デュプレと同門である、当夜会でのブーランジェ氏は、その精神と技法において、ショロン門下の最も誇り得る歌い手の一人である。」（Berlioz 2001: 435）[30]というベルリオーズの一文がある。

ブーランジェの師であるアレクサンドル=エティエンヌ・ショロン（Alexandre-Étienne Choron, 1771-1834）は、理工科系エリート校（エコール・ポリテクニック）出身の数学学者でありながら、革命や度重なる体制の変換で疲弊した宗教音楽界の改革を試み、オペラ座の舞台監督を経て1817年にヴォジラール通り69番地に「王立クラシック音楽および宗教音楽学院」を設立した音楽学者であった。この学院は瞬く間に評判となり、ショロンは「パリ音楽院出身と称する大部分の若手歌劇俳優が、実はオペラ座デビュー以前に、ショロンのもとで真剣に学んでいた。」（Berlioz 1997: 357）、とベルリオーズに形容されるほど、多大な影響力を持つ音楽教育界のエキスパートとなった。ショパンの親友のひとりで、ショパンのデビュー・コンサートに参加したドイツ人ピアニストのヒラー（Ferdinand Hiller, 1811-1885）も、短期間だが1829年前後からこの音楽院で教鞭を執っている（Baker 1900: 275）。数多くの音楽家を輩出したにもかかわらず、この学院は七月革命によって政府から補助金を打ち切られ、ショロンも 1834 年に他界したため、その後、閉校に追い込まれてしまう。

[30] ジルベール・デュプレ（Gilbert Duprez, 1806-1896）はフランスのテノール歌手。ロッシーニのグランド・オペラ『ウィリアム・テル』のイタリア公演で男声として初めて胸声で歌い、一躍有名になった。

生前、ショロンはフランスにおける宗教音楽の復活と伝統の継承において、主導的な役割を果たし、教育者としても揺るぎない名声を得ていたが、中には批判的な見解もあったようだ。1834 年 8 月 24 日付けの『ガゼット・ミュジカル・ド・パリ』誌に「ショロンの履歴書」と題して掲載された、彼の指導方針に言及した記事がある。

> しかし、全体の完成度にこだわるあまり、ショロンが各自への個別な歌唱指導を疎かにしすぎたことは認めざるを得ない。技法のプロセスを知らなかったのか、あるいは自身のメソッドの結果を過大評価していたのか、彼は自分の教育を受けたアーチストたちの、一流の歌手になるための天賦の才能を伸ばそうとはしなかったのである。デュプレを除いて、この音楽院から輩出されたスター歌手を知らない。しかし、その一方で、彼の門下に優れた音楽家、二番手の歌手、優れた教師は数えきれない！全て紹介しきれないが、ジャンセンヌ、ワルテル、テナール、ヘベール、Am. ブーランジェ、イポリット・モンプー、デュプレ夫人方、マスィ、など、など（Schlesinger 1834: 271）。

7．C. アメデ・ブーランジェ

二番手と評されてしまった C. アメデ・ブーランジェだが、彼はヴェルサイユに生まれ、1819 年にショロンによって開かれたばかりの学院に入学し、すぐにショロンのお気に入りの生徒の一人となった。洗練された身のこなしと魅力的な容姿に加え、とても美しいボーイ・ソプラノだったという。まだ変声期も脱しない 1822 年に、イタリア座で上演されたパエール（Ferdinando Paër, 1771-1839）作曲のオペラ『カミラ』で子供役を演じ、大成功を収め、その後、ショロンの音楽院で指導者としてのキャリアもスタートさせる[31]。1830 年にパエールの教え子であったクンツェ嬢と結婚。フランス、ベルギー、イギリス、ドイツへ旅立ち、二人のエレガントで洗練された歌声と才能は各地で高い評価を受けた（Elwart 1862: 412）。パリでは歌手活動と並行して、さまざまな宗教施設や教育施設で後

[31]ショロンの王立宗教音楽学院で 1827 年 3 月 22 日に開催される第 3 回演習会予告プログラム（Fétis 1827: 172）に M. ブーランジェの名が記されている。曲目は Clari 神父作曲の“Addio campagne amene”。“スピリチュアル・コンサート”と題されたこのイベントは学院内で指導者や生徒の演習を目的として定期的に開かれていた。

進の育成に力を注ぐ。指導力に優れ、歌手としても人気の高かったブーランジェは、パリで最も望まれる教師の一人であった。

自身の声質や声量がオペラには不向きと自覚していた彼は、次第に活動の場を劇場からサロンへと移行させ、自作のロマンスやノクターンを武器に、その後も順調に歌い続けた。夫妻で定期的に主催していたサロンは、当時の音楽界をリードする、エリートたちの集う場所として一目置かれていたようだ。後年はさらに教育に邁進し、数多くのレッスンこなしながら充実した 56 年の生涯を閉じた。1862 年 12 月 21 日発行の『ルビュ・エ・ガゼット・ミュジカル・ド・パリ』誌には、「音楽界は、またしても残念な損失を被った。ブーランジェ＝クンゼ氏は今月 14 日、心臓病による長い苦悩の末に亡くなった。」（Brandus 1862: 415）という訃報記事が掲載され、ショロン校で共に学んだスクード（Paul Scudo, 1806-1864）からは[32]、「洗練された信頼に値する人物で、優れた音楽家であり、センスある歌い手である。ブーランジェ＝クンゼ氏は存在感のある、過酷だが名誉ある生涯を送った。」（La Salle et Thoinan 1863: 312-313）という弔辞が寄せられた。

おわりに

20 年以上もの間、パリのあらゆるサロンに招かれて歌い、多くの演奏協会が主催するコンサート・シリーズに定期的に出演し、指導者としての評判も高かった時代の成功者であるにもかかわらず、今日に残る C. アメデ・ブーランジェの情報は極めて少ない。その全貌は当時の音楽雑誌やプログラム、出版された作品、フランスの政府機関に保存されている断片的な痕跡から推定するのみである。限られた資料からではあったが、コンサートで歌ったとされる作品が C. アメデ・ブーランジェの出版楽譜タイトルと多数一致していること、ブーランジェ＝クンゼ夫人の夫がシャルル＝アメデ・ブーランジェであることを示す公文書の存在、同世代の音楽家による証言などによって、ショパンのデビュー・コンサートに招かれて歌ったテノール歌手は、やはり、C. アメデ・ブーランジェだという結論に至る。

録音も録画も無かった時代に活躍したブーランジェの歌声を実際に聴くことは不可能だが、この調査によって、各界で頭角を現したさまざまな“ブーランジェ”に紛れてしまった C. A. ブーランジェの存在とその活動を再評価するきっかけになれば幸いである。

[32]ポール・スクードは、多数の音楽雑誌に寄稿していた音楽解説者、音楽評論家。

参考文献

Archives de Paris 2022. Acte de mariage de Charles-Amédée Boulanger-Kunzé, 14 août 1830. V3E/M549. *Archives de Paris en ligne, fichier alphabétique de l'état civil reconstitué*. consulté le 20 septembre 2022. https://archives.paris.fr/s/5/etat-civil-reconstituefichiers /?&action=1&todo=modif_recherche.

Ancien élève du conservatoire, Un (18..-18..). 1836. *Agenda musical pour l'année ... [Texte imprimé] : contenant tous les renseignements utiles aux amateurs de musique et aux artistes / publié par un ancien élève du Conservatoire.* Paris: au bureau du Recueil des arts. p.60.

Atwood, William G. 1987. *Fryderyk Chopin, Pianist from Warsaw.* New York: Columbia University Press.

Austin, Michel. 1997. “Berlioz in Paris - Concerts and performances 1825-1869” *Site Hector Berlioz.* consulté le 20 septembre 2022. http://www.hberlioz.com/Paris/ berlioz2569e.htm.

Baker, Theodore. 1900. *A Biographical Dictionary of Musicians*. New York: G. Schirmer. pp. 275-276.

Berlioz, Hector. 1997. *Critique musicale, tome 1*: 1823-1834. Paris: Buchet Chastel.

_____. 1998. *Critique musicale, tome 2*: 1835-1836. Paris: Buchet Chastel.

_____. 2001. *Critique musicale, tome 3*: 1837-1838. Paris: Buchet Chastel.

_____. 2003. *Critique musicale, tome 4*: 1839-1841. Paris: Buchet Chastel.

Bibliothèque nationale de France 2022. “Charles-Amédée Boulanger-Kunzé (1806-1862)” . *Data BnF*. https://data.bnf.fr/fr/16320678/charles-amedee_boulanger-kunze/.

Blanchard, Henri. 1838. “M. Sowinski” *Revue et Gazette musicale de Paris,* cinquième année, 1 avril 1838, N°13. p.145.

_____. 1842. ”Le théâtre national de l’Opéra-Comique.Le Diableà l’école.” *Revue et Gazette musicale de Paris,* neuvième année, 23 janvier 1842, N°4.

Boulanger, Ernest. 1836a. Ernest Boulanger à sa mère, 6 février 1836, Lyon, NLA-302（10）, Fonds Nadia Boulanger, Bibliothèque nationale de France, Paris.

_____. 1836b. Ernest Boulanger à sa mère, 13 février 1836, Marseille, NLA-302（11）, Fonds Nadia Boulanger, Bibliothèque nationale de France, Paris.

_____. 1836c. Ernest Boulanger à sa mère, février 1836, Gênes, NLA-302（12）, Fonds Nadia Boulanger, Bibliothèque nationale de France, Paris.

_____. 1838a. Ernest Boulanger à sa mère, 14 juillet 1838, Venise, NLA-302（35）, Fonds Nadia Boulanger, Bibliothèque nationale de France, Paris.

_____. 1838b. Ernest Boulanger à sa mère, 21 et 29 juillet 1838, Vienne, NLA-302（36, 37）, Fonds Nadia Boulanger, Bibliothèque nationale de France, Paris.

_____. 1838c. Ernest Boulanger à sa mère, 8 et 15 août 1838, Munich, NLA-302（38, 39）, Fonds Nadia Boulanger, Bibliothèque nationale de France, Paris.

_____. 1838d. Ernest Boulanger à sa mère, 21août 1838, Strasbourg, NLA-302（40）, Fonds Nadia Boulanger, Bibliothèque nationale de France, Paris.

Brandus, Louis, ed. 1850. ”Nécrologie.” *Revue et Gazette Musical de Paris,* dix-septième année, 28 juillet 1850, N°30.

_____. ed. 1862. “Les Nouvelles.” *Revue et Gazette Musical de Paris,* vingt-neuvième année, 21 décembre 1862, Nº51.

Caisse d'épargne de Paris et Île-de-France 2022. Archives de la CEP - Paris (Paris, France) - Archives privées | 1830-1870. *Geneanet.* consulté le 25 août 2022. https://www.geneanet.org/registres/view/26293/9.

Chopin, Frédéric. 1993. *Correspondance de Frédéric Chopin, tome 2 : L’Ascension, 1831-1840*: Hermann.

Citron, Pierre. 2000. *Calendrier Berlioz. Cahiers Berlioz n° 4.* La Côte-Saint-André: Association nationale Hector Berlioz.

Corby, M. 1847. *Almanach des 25000 adresses des principaux habitants de Paris—Année 1847—33e année.* Paris: Au bureau de l'Almanach.

Eigeldinger Jean-Jacques. 2008. “Documentsinconnus concernant le premier concert de Chopin à Paris（25 février 1832）. ” Notes et Documents, *Revue de musicologie*, Tome 94, No.2. Paris: Société Française de Musicologie. p. 575-584.

_____. 2010. “Chapitrepremier—Le concert inaugural de Chopin chez Pleyel（25 février 1832）—À l'ombre de Kalkbrenner.” *Chopin et Pleyel*. Paris: Fayard. p.7-24.

_____. 2013. *Chopin âme des salons parisiens*. Paris: Fayard.

Elwart, Antoine-Elie. 1860. *Histoire de la Société des concerts du Conservatoire impérial demusique*. Paris: S. Castel.

_____. 1862. “Amédée Boulanger-Kunzé.” *L'Univers musical,* dixième année, jeudi 25 décembre 1862, Nº52.

Escudier, Léon, Marie Escudier, ed. 1838. “Soirées musicales de la Cité d’ Orléans” France Musicale, première année, 18 février 1838, Nº8.

Fétis, François-Joseph, ed. 1827a. “Annonces Diverses. Partie Française.” *Revue Musicale de Paris,* première année, Mars 1827, Nº6.

_____. ed. 1827b. “Annonces Diverses.” *Revue Musicale de Paris,* première année, Juin 1827, Nº17.

_____. ed. 1832a. “Nouvelles de Paris.” *Revue Musicale de Paris,* cinquième année, 7 Janvier 1832, Nº48.

_____. ed. 1832b. “Nouvelles de Paris.” *Revue musicale de Paris,* sixième année, 18 février 1832, Nº3.

_____. ed. 1832c. “Concert de M. Chopin, de Varsovie.” *Revue musicale de Paris,* sixième année, 3 mars 1832, Nº5. p. 38-39.

_____. 1866-1867. *Biographie universelle des musiciens et bibliographie générale de la musique*. Paris: Firmin Didot.

G., S. 1836. “Concert de M. Charles Scunke.” *Revue et Gazette Musical de Paris,* 1836, troisième année, 14 février 1836, Nº7. p. 54

Guiffrey, Jules et Barthelemy J. 1908. *Liste des pensionnaires de l'Academie de France à Rome : donnant les noms de tous les artistes récompensés dans les concours du Prix de Rome de 1663 à 1907*. Paris: Firmin Didot. p.1-10.

De La Grandville, Frédéric. 2014. *Dictionnaire biographique des élèves et aspirants du Conservatoire de musique de Paris (1795-1815). l’IRPMF*. 82-83/717. https://api.nakala.fr/data/11280%2F65535d96/60b794b154a108fb603426aab82110292ac5c9dc.

Havard de la Montagne, Denis. 2000. “Prix de Rome en 1830-1839: 1835 Ernest Boulanger(1815-1900).” *Musica et Memoria*. consulté le 22 août 2022. http://www.musimem.com/prix-de-rome-1830-1839.htm#boulanger.

Heugel, Jacques-Léopold. ed. 1837. “Concert du Ménestrel.” *Le Ménestrel,* quatrième année, 26 novembre 1837, N°208.

_____. ed. “Collection des Œuvres de M. Romagnési.” *Le Ménestrel,* cinquième année, 4 février 1838, N°218.

Huberson, G. 1891. *Nouveau Manuel Complet de L’accordeur et du réparateur de pianos*. Paris: L. Laget. p.11.

Jacquot, Albert. 1886. *Dictionnaire des instruments de musique*. Paris: Librarie Fischbacher. p.181.

Jude, Jean. 2022. *Camille Pleyel - Frédéric Chopin. Les talents réunis*. s.l.

Jullien, Adolphe. 1896. “Choron et Fétis.” *Musique : mélanges d'histoire et de critique et dramatique*. Paris: Librairie de l'art. p.170-186.

Kastner, G. 1837. “Concert donnépar M. Osborne.” *Revue et Gazette musicale de Paris,* quatrième année, 1 avril 1837, N°14. p.113-114.

De Lasalle, Albert et Ernest Thoinan.1863. *La musique à Paris.* Paris: Morizot.

Morgan Library and Museum. 2008. “Programme du premier concert de Chopin chez Pleyel, 9 rue Cadet, le 25 fevrier 1832.” *The James Fuld Collection.* The Pierpont Morgan Library, New York.

N., S. ed. 1832. *L’Eclaireur,* première année, p.1.

Pierre, Constant. 1900. *Le Conservatoire national de musique et de déclamation: documents historiques et administratifs*. Paris: Impr. Nationale.

Pleyel. 2023. “La Belle Histoire.” *Pleyel International*. consulté le 31 janvier 2023. https://www.pleyel.com/fr/la-belle-histoire.

R., P. 1834. “Troisième concert de M. Berlioz.” *Gazette musicale de Paris,* première année, 28 décembre 1834, N°51. p.424-426.

Rambeau, Marie-Paule. 2005. *Chopin : L'enchanteur autoritaire.* Paris: L'Harmattan.

Rosenstiel, Leonie. 1978. *The Life and Works of Lili Boulanger*. London: Fairleigh Dickinson University Press.

_____. 1982. *Nadia Boulanger a Life in Music*. New York: W. W. Norton & Company.

Schlesinger, Maurice. ed. 1834. “Biographie. — Choron.” *Gazette Musicale de Paris,* première année, 24 août 1834, N°34. p. 269-273.

_____. ed. 1835. “Nouvelles.” *Revue et Gazette Musical de Paris,* deuxième année, 7 juin 1835, N°23.

_____. ed. 1836a. “Nouvelles.” *Revue et Gazette Musical de Paris,* 1836, troisième année, 1 mai 1836, N°18. p. 148.

_____. ed. 1836b. “Musique Nouvelle.” *Revue et Gazette Musical de Paris,* troisième année, 24 juillet 1836, N°30. p. 265.

_____. ed. 1837a. “Nouvelles.” *Revue et Gazette Musical de Paris,* quatrième année, 28 janvier 1837, N°5. p. 4.

_____. ed. 1837b. “Nouvelles.” *Revue et Gazette Musical de Paris,* quatrième année, 5 mars 1837, Nº10. p. 82.

_____. ed. 1837c. “Nouvelles.” *Revue et Gazette Musical de Paris,* quatrième année, 12 mars 1837, Nº11. p. 91

_____. ed. 1837d. “Nouvelles.” *Revue et Gazette Musical de Paris,* quatrième année, 1 avril 1837, Nº14. p. 115.

_____. ed. 1837e. “Nouvelles.” *Revue et Gazette Musical de Paris,* quatrième année, 31 décembre 1837, Nº53. p. 577.

_____. ed. 1838a. *Revue et Gazette Musical de Paris,* cinquième année, 11 février 1838, Nº6.

_____. ed. 1838b. “Nouvelles.” *Revue et Gazette Musical de Paris,* cinquième année, 19 août 1838, Nº33. p. 336.

Schoderlichenerasfeldesberg, Jacques. 1839. “A S.A.S. Le Prince de ***—Trait de M.de Louvois.—Concerts.” *Revue et Gazette Musicale de Paris,* sixième année, 15 janvier 1839, Nº3. p. 19-20.

Strunz, J. 1838. “Concert au Bénéfice d’un Artiste.” *Revue et Gazette Musical de Paris,* cinquième année, 29 avril 1838, Nº17. p.176-177.

協力/感謝

Michel Austin (Site Hector Berlioz）.

François-Pierre Goy (Bibliothèque Nationale de France Département de la Musique).

Marilyn Palmeri (The Morgan Library & Museum Imaging and Rights) .

Kaitlyn Krieg (The Morgan Library & Museum Imaging and Rights).

上田泰史（京都大学大学院人間・環境学研究科総合人間学部准教授）。